

各関係機関長 様

熊本県病虫害防除所長

トビイロウンカの発生状況（技術情報第11号）について（送付）

トビイロウンカの発生状況については、平成22年8月6日付け病防第53号で技術情報を発表しましたが、その後の発生状況について、下記のとおり取りまとめましたので、業務の参考に御活用下さい。  
記

## 1 発生状況

- (1) 早植え水稻の8月中旬の巡回調査では、一株当たりの成幼虫数が0.5頭（平年1.1頭）と平年に比べてやや少なく、発生ほ場率は70.0%（平年41.7%）と平年に比べて高いものの（図1）、要防除水準（収穫30日前：3頭/株）を超えるほ場はなかった。
- (2) 普通期水稻の8月中旬の巡回調査では、一株当たりの成幼虫数は0.1頭（平年0.1頭）で平年並、発生ほ場率は50.0%（平年31.9%）と平年に比べてやや高いものの（図2）、要防除水準（8月中～下旬：1頭/株）を超えるほ場はなかった。
- (3) 6月17日移植の県予察ほ場（農研センター内の無防除田）での8月12日の払い落とし調査では、一株当たりの成幼虫数が1.7頭（昨年8.4頭、一昨年0.0頭）と要防除水準（8月中～下旬：1頭/株）を超えており、昨年比少、一昨年比やや多であった（図3）。

## 2 普通期水稻の防除対策

- (1) **発生状況は平年並である。しかし、向こう1ヶ月の気温は高い見込みで、トビイロウンカの生育に好適であることから、発生状況に注意し、以下の防除対策を徹底する。**
- (2) 普通作水稻における主飛来は、7月12日と考えられる。
- (3) 6月中旬までに定植したほ場では、7月12日だけでなく6月20日飛来波も定着しているため、注意が必要である。
- (4) 予想される今後の幼虫ふ化期は、次のとおりである（図4）。  
6月20日飛来                   ：9月4日  
7月12日飛来【主飛来】：8月25日  
※予測には熊本市アメダスデータを使用
- (5) トビイロウンカの飛来量は地域やほ場あるいは移植時期で異なる。また、同一ほ場内でも発生にかたよりが認められる。各ほ場における発生量及び発育ステージを図4を参考に定期的に確認する必要がある。
- (6) 要防除水準は、8月中～下旬で1頭/株、収穫30日前で3頭/株である。要防除水準を超える場合は、ただちに防除する。
- (7) 防除適期は、幼虫ふ化期から1週間（ふ化揃い期）である（図4）。
- (8) トビイロウンカは、水稻の株元近くに生息する。粉剤及び液剤は、株元に付着するように散布する。
- (9) トビイロウンカは、イミダクロプリド剤及びBPMC剤に対する感受性が低下している。
- (10) 農薬を使用する際は、必ずラベルなどで使用方法を確認し、登録がある農薬を使うとともに、収穫前使用日数や使用回数、希釈倍数等を遵守する。また、ミツバチや魚介類など周辺動植物及び環境へ影響がないよう、飛散防止を徹底するとともに、事前に周辺の住民や養蜂業者等へ薬剤散布の連絡を行なうなど、危害防止に努める。

熊本県農業研究センター生産環境研究所  
病虫害研究室予察指導係（病虫害防除所）  
担当：東、山口 tel 096-248-6490

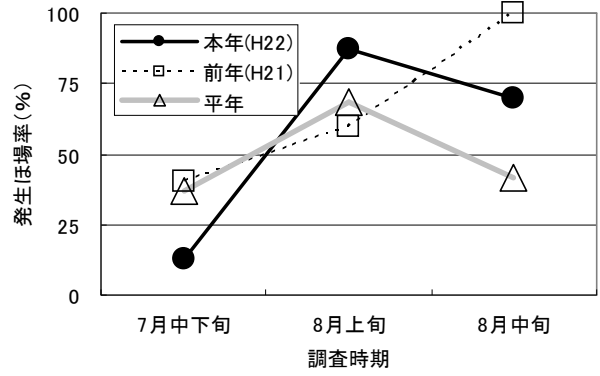
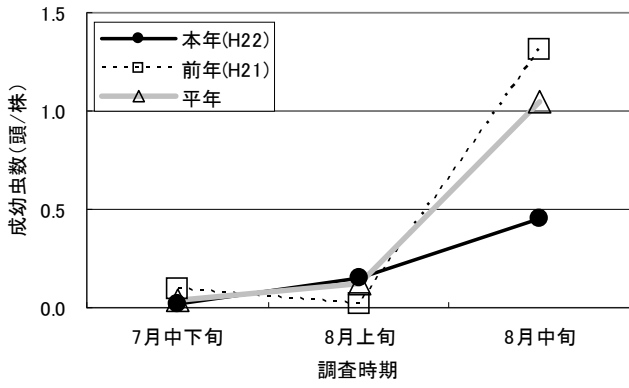


図1 早植え水稻のトビイロウンカ調査結果 (左：成幼虫数 右：発生ほ場率)  
注) 平年：H12～H21 (8月上旬の平年値はH18～H21)

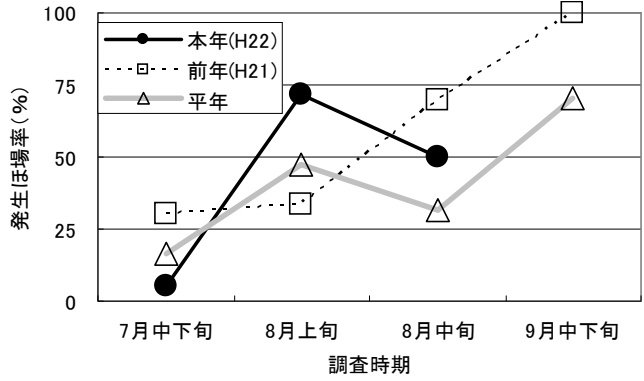
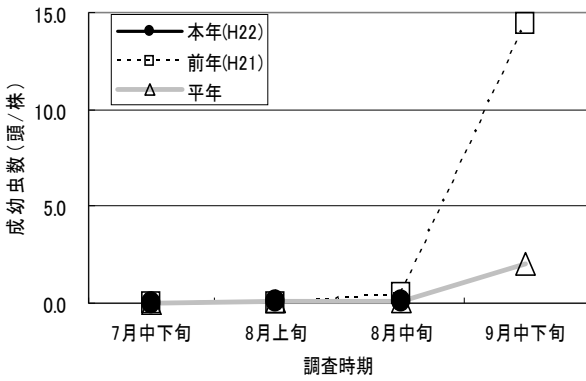


図2 普通期水稻のトビイロウンカ調査結果 (左：成幼虫数 右：発生ほ場率)  
注) 平年：H12～H21 (8月上旬の平年値はH18～H21)

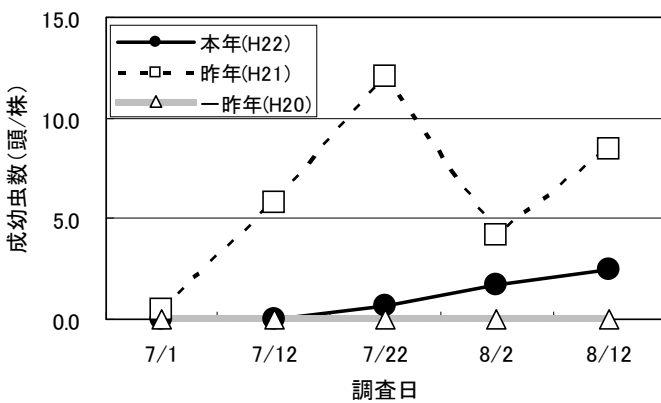


図3 県予察ほにおけるトビイロウンカの発生推移  
(農研センター無防除田：6月17日定植)

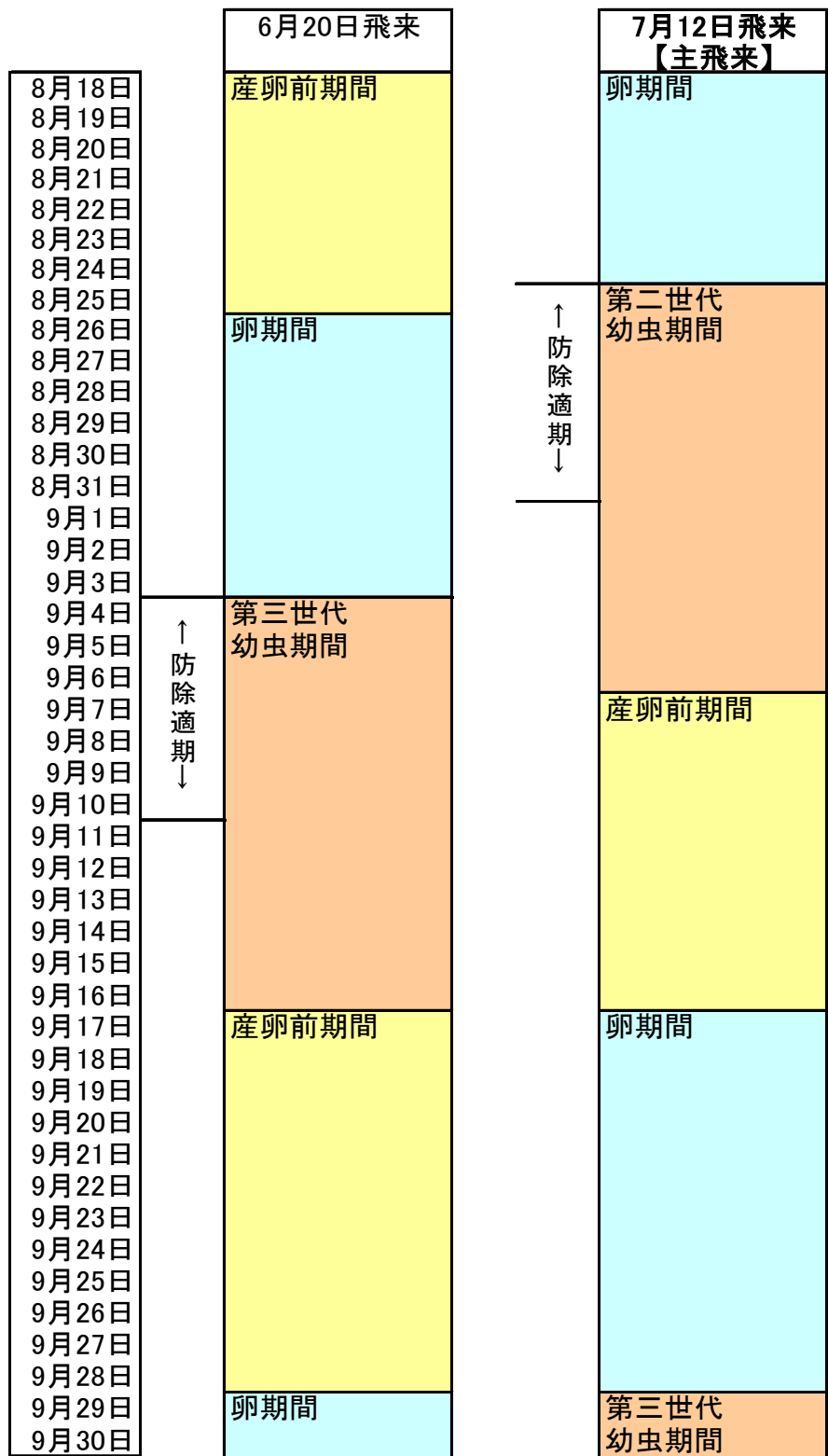


図4 有効積算温度によるトビイロウンカの次世代予測（アメダスデータ：熊本市）